

# 動物愛護センターにおけるふれあい犬の育成について

長野県動物愛護センター  
○ 小林雅巳 大木正行 小林文範 丑山隆雄

## 1 はじめに

当センターでは、ふれあい犬のトレーニング及び適性診断を行って、動物介在活動に使用する犬の育成をしている。

なお、福祉施設や病院、学校等への訪問活動もボランティアの協力を頂きながら行っているため、当所としてもふれあいに対応できる犬が求められる。

今回は、過去3年間に実施したふれあい犬20例の育成について、特徴的な3つの事例を報告する。

## 2 期間

平成12年4月～平成15年3月

## 3 ふれあい犬の条件及び育成方法

表一1 ふれあい犬の条件

条 件 項 目
① 陽性反応強化法で基礎服従訓練ができています
② 知らない人に会っても興奮せず、落ち着いていられる
③ 他の犬に対して興奮しない
④ 他の動物に対して興奮しない
⑤ 人ごみの中でも落ち着いていられる
⑥ 音に対して過剰に反応しない
⑦ 人や他の動物に対して、攻撃性が無い
⑧ クレートでの移動等ができ、落ち着いて入っていられる

### (1) トレーニング

- 基礎服従訓練
- 社会化トレーニング
- 環境変化の少ない当センターでのふれあい活動
- 環境変化の多い場所で、犬をリラックスさせ落ち着かせる
- クレートトレーニング
- ハンドラーとの信頼関係の構築
- 犬のストレスサインを見逃さない

### (2) 健康管理

- 訪問活動前にグルーミングを済ませる
- 散歩及び運動
- 排便・排尿の状態を観察する
- 当センター獣医師による定期健康診断
- 活動当日の健康チェック

## 4 結果及び考察

表一2 ふれあい訪問活動事業

訪問場所	平成12年度	平成13年度	平成14年度
老人ホーム 知的障害者施設	20回	39回	39回
病院・療養所	5回	14回	16回
計	25回	53回	55回

○ 上記表のとおり訪問事業を実施しているが、このほとんどに当センターのふれあい犬が活動している。当センターで活動中のふれあい犬は、これまで延べ20頭、現在は9頭(候補犬2頭含む)であるが、次の3頭の事例について説明する。

事例1)

○ ゴールデンレトリバー メス 1歳 23kg  
平成12年4月保健所に生後9ヶ月で引き取られ、当センターに搬入される。その後ふれあい犬としてトレーニングを開始する。  
性格は、飼い主には忠実で、基礎服従訓練はできていたが、独占欲及び支配性が強かったため多数の人とのふれあいには適性が無いと判断した。

事例2)

○ 雑種 メス 3歳 4.6kg  
平成12年6月生後50日で保健所に引き取られ、当センターに搬入される。その後ふれあい犬としてトレーニングを開始、平成12年12月より活動している。  
性格は、当初非常に臆病な面と、限られた人にだけしか慣れないところがありふれあい犬として適性か否か判断するところだったが、トレーニングを重ねる事で許容能力が増し、成功した例である。  
現在では、小型犬のメリットを活かし訪問活動では、抱擁犬として活動している。

事例3)

○ 雑種 メス 2歳 6.5kg  
平成12年11月生後50日で保健所に引き取られ、当センターに搬入される。その後ふれあい犬としてトレーニングを開始、平成13年4月より活動している。  
性格は人に対してのコンタクトが良くとれ、集中させやすい。好奇心が旺盛で興奮する事もあるが、すぐ落ち着いた状態に戻ることができる。適性診断で適性と判断し現在も活動している成功例である。  
ふれあい犬の適性については、先天的な性格が大きく左右され、後天的に許容能力の増すタイプと、トレーニングではあまり変化しないタイプに分類できる。

5 まとめ

動物介在活動を目的としたふれあい犬の育成方針については、犬のストレスサインを見逃さず良く観察する事と、ハンドラーとの信頼関係を構築しトレーニングを積み重ねる事が重要である。  
適性診断で合格してもふれあい犬として必ず育成できるとは限らないため、安全な活動を追及していくためには、育成段階においても適性か否かをしっかり判断する事が大切である。  
今後さらに事例を積み上げて育成のマニュアル化を図ってゆきたい。